

タイトル：涙は川の流れるように心を通り抜ける

舞台設定 時期：一期・狡噛離反後、雑賀邸にて。メイン：狡噛による、新任監視官着任当初の回想。宜野座との追憶。

特記事項 R16程度？ 性表現あってもソフトで詳細描写なし。

目次

1、たゆたう色相：雑賀邸に到着した狡噛。雑賀の顔を見たら急に心が動揺してくるも本人は気づいていない。

狡噛の無意識のざわつきを察した雑賀が酒を勧める。

2、危うい心：狡噛が混沌の深みにハマらないように雑賀の分析と機転からつまらないジョークではぐらかす。

雑賀は家を出る覚悟を決める。

3、極寒の夜・前：バスルームにて。狡噛、新人監視官時代回想（任務中車内）

ベテラン執行官佐々山と内藤を引き連れて訪れた冬の山奥での夜。体を寄せ合い温め合う狡噛・宜野座

4、極寒の夜・後：3の続き 狡噛・宜野座 ソフト描写の回想からの、今軸 バスルーム。一瞬だが狡噛セルフ描写あり

5、後悔をしない男：監視官時代回想（宜野座の部屋。ただし性描写なし）

狡噛の涙。

確かに泣くことは赦ゆるされているのだ。

涙は激しい怒りを押し流す。

涙は川の流れのように、心を通り抜ける

オウイデイウス

1、たゆたう色相

本当の試練はこれから始まる。……だから死ぬな。

——埼玉県秩父市。森に囲まれた小高い山の斜面にある家。

天気が良いければ昼間は眺めもよく、遠くに美しい稜線を描く山々、そして耳に心地よい川の流れを聞くこともできる。庭先には菜園と小さな鶏小屋を持つこの家の主は、夜になって胸騒ぎを覚えていた。

近頃菜園の手入れもあまりしていない。

それは、やがてここを手放すことになるかもしれないという、ちょっとした予感がしていたからだった。

予感……そういう言葉でやり過ごしたいだけだろう。

予感なのではなく、それは現実に間違いないと起きるのだと家主はわかっていた。

その時が近い。

リビングから見える稜線に時折小さな光が見えていた。

森の木々によって断続的に消えはするが、

今ほとんど物資輸送にしか使われなくなったに等しい蛇行するその道を光が登ってきている。

——バイク・・・か——

この家の主、雑賀譲二はリビングの大画面テレビを静かに消した。

連日のように都心で起きた暴動事件とそれに伴うサイコハザード、ヘルメットを被った犯罪係数を計測できない集団、そして
なによりこの社会の基軸であるシビュラシステムの完全復旧に時間がかかることについてのニュースが流れている。
システムから解放された暴徒の横行を未だ公安局職員とドローンが鎮圧できずにいた。

もちろん、こんなニュースを連日報道していれば視聴者の色相は濁るため、

お誂えのセラピー薬や治療の促進を促すCMが頻繁に流れており、わざとらしいほど明るい演出に雑賀は嫌気がさす。
いっそ大自然の景色でも流せば癒しになるだろうに——次々と流れる製薬会社CMにはうんざりだ。

その時、一台のオートバイのエンジン音が近づき、そして止まる。

先ほど眼下にちらちらと見えていた光の主だ。

小さくため息をついてまっすぐ玄関へと歩き出す。

インターホンに応答するまでもない。

雑賀はここにくる人物が誰かはすでにあたりはついていてた。

ここを知っている人間など高が知れているからではない・・・

ここにくるしか他に道はないと、あいつならそう考えるからだ。
コウガミ

「先生・・・」

その声は低くしかし弱々しく、少し震えてもいるようなトーンだった。

こいつはいつも自分の世界に入る。

とりわけ強い決意をしている時は。

その時に放つ特有の気配は、その必死さや重苦しさを押し殺すようにあまりに静かだった。

彼の声のトーンに合わせるように雑賀も静かに低く返す。

「あんな事件のあとに、お前が監視官抜きでやってきた。・・・どうやら、とんでもないことになってるな。」

……とにかく、入れ。この辺りに人はいないが、いくら用心してもしすぎるといふことはない」

「すみません……」

狡嚙慎也。かつての教え子。

厚生省公安局刑事課一係執行官。

いや、今は逃亡者か。

狡嚙は少し前に上司であり後輩でもある新人監視官…常守朱をここに連れてきて、

プロファイリングの特別講義をして欲しいと言ってきた。

あれからさまざまなのが動き出したと言っている。

まるで公安局を試すかのように恐ろしい事件が次々に起きた。

そんな事件が今までもなかったわけではない。

しかしこの数年は、まだ穏やかなほうだった。

ところが公安局の手に余るほどの暴動事件が起きた。

自分が、公安局に関わるようになって以来、ずっと何かに巻き込まれていたのかもしれない。誰かの思惑で、組織の方針で・・・利用され、動かされてきた気がする。

しかし常守に関しては別件だ。

彼女は筋がいい。こう言ってはなんだが、狡噛よりずっと人を見ていて・・・まあいい。今は彼女のこと心配だが、まずは狡噛だ。

・・・結局、雑賀はまた期せずして人の都合に巻き込まれる運命なのだと感じていた。

――かつて、俺と話したやつはみな色相が濁ると噂されたが・・・濁りたい奴が俺に近づくのかそれとも俺がそういう人間を惹きつけるのか。それは俺が望んでいることなのか・・・それとも・・・いったいなんなんだ――

客観的観察力と論理的思考で自分を100パーセント理解しているとしたらそれは傲慢というものだ。

わかるはずもない。

だが。もう後戻りはできさそうだ。

そうだな・・・もう、庭の菜園の世話はしなくてすむ。

かつて雑賀は厚生省公安局講堂で行われたシビュラ応用犯罪心理学特別教室。通称、雑賀教室で教鞭をとった。

公安局特別講師として呼ばれた雑賀がまだ当時ひよっこ監視官だった狡噛と視線を絡め合った時に交わした言葉が脳裏に過ぎる。

『利益を求めるものの行動はわかりやすい。しかし、自分が自分であるための犯罪、となるとこれは対応しづらい。堤防が決壊する瞬間のように、突発的かつ同時多発的に暴力が発生する可能性は否定できない』
その時、その頃はまだ二十代半ばにも満たない狡噛が手を挙げてこう発言した。

『その際には何らかの方法でシビュラシステムの監視を潜り抜ける扇動者の出現が絶対条件であるように思えるのですが』

・・・そう、そんな扇動者が現れた時、公安局は有効な対策を講じることができるだろうか？
その扇動者が犯罪係数の測れない人物だったら・・・？

危惧していたことが現実に起きたのだ。

だから・・・この案件は、厚生省公安局への、シビユラシステムへの挑戦である一方でこれを予見していた雑賀と狡噛があの時出せなかった答えを提出させられるような気がする。

「とにかく座って休め。大体の事情は察しているつもりだ」

狡噛はヘルメットを・・・街頭スキャンに反応しない色相を偽装するヘルメットと脱いだ上着をリビングのソファに置いて座った。

顔色はあまりよくない。

いつもと変わらぬ落ち着き払った理知的な表情をしているが、その目は明らかに動揺が隠せていなかった。

雑賀の顔を見た途端、張り詰めていた緊張が解けたのだ。

本人は自覚していないだろう。

関わった人々へのみならず、自分自身に対してもよっぽどのことをしているのだと。

その横顔が、初老の雑賀には、親にイタズラがバレることを恐れて怯える子供のようにも見えて、呆れた顔をしながらグラスを差し出した。

ウイスキーのロック。

カランという音を立てて琥珀色の液体の中で氷がゆっくりと回る。

「飲め^{やれ}。少しは落ち着く」

「・・・落ち着いてますよ」

「本当に落ち着いている奴の言葉かよ。ばか。ほら。飲めないわけじゃないんだろ？」

雑賀が狡嚙の頬にグラスを押し付けた。

その冷たさに目を丸くする狡嚙。こんなことでビクツとしている自分に驚いた。

狡嚙がゆっくりグラスを受け取って両手で包む。

執行官になる前に酒の味は多少覚えた。

タバコも酒も監視官時代に組んでいた佐々山という執行官の影響だ。

さらに大先輩であり尊敬する伝説の刑事・柗陸の影響も加わって、ある程度は強くなった。飲めないわけではない。ただ・・・

酔ってしまったら、意識を鮮明に保つことができなくなったら、

今も逃亡しつづけ次の策を練っているであろう榎島聖護を追い詰める方法を、彼の行く先を考えられなくなってしまうという焦りがあった。

そんなはずはない。あいつは^{マキシマ}こちらの出方を見るはずだ。

しかし今の狡噛は後がないような切羽詰まった感覚に襲われている。

おそらく、狡噛は気づいていない。それは榎島聖護も同じだということ。

二人はシンクロしていると雑賀は読んだ。^{サイコパス}色相がかなり濁っているはずだ。

——だめだ。少なくとも今は。戻ってこい、狡噛——

2、危うい心

雑賀は狡噛の隣に腰掛けて背もたれにもたれかかる。

この前ここにきた時は気づかなかったが、初めて雑賀教室で会ったときに比べたら随分とたくましくなった。

刑事らしくなったと言えばそれまでだが、今の公安局刑事課にここまでのタフさは求められないと思っていた雑賀からすれば、必要以上に鍛えられて、ひとまわり以上も大きくなっていく肉体はそれだけ過酷な鍛錬を課しているということ。公安局刑事課執行官の仕事がそれほど過酷になってきているのは言うまでもなかったが、それにも増して狡噛のストイックさには恐れ入る。

だが、これのおかげでこの男は最後まで犯人を追い続けることができ、どこまでも突っ走ろうとしている。

今はその広い背中が、厚い胸板が、震えているように雑賀には見えた。

いや、実際は震えていない、そんな柔な男ではない。

ただ、狡噛の内面で起きている混乱とも混沌とも言える感覚を雑賀は感じていたのだ。

——この男は……優しすぎるからな。それを分かってない——

「……ぶはあ……」狡噛が一気にウイスキーを飲み干す。灼けるように熱い液体が喉を通過した。

バイクのハンドルを余程強く握りしめていたのか、熱を持った両手がよく冷えたグラスにじっとりと汗をかかせる。

離反することへの罪悪感……というよりは、裏切ってしまった常守のこと、彼女はどうなっているだろう。

唐乃杜はきつと何も言わないだろうし、六合塚と二人してダンマリを決めるとしても……。

無視されることを何より嫌う宜野座に一言も声をかけずに去ってきってしまったこと。

宜野座とはただでさえ仲が最悪な父親である柁陸が、同期の親友であった狡噛の逃亡の手伝いをしたと知ったら？

ドミネーターをこちらに向けた時のあいつの硬直した目。

危うくエリミネートされるところだったが、あれは本当にドミネーターの故障なのだろうか？

宜野座は俺の体が肉片になっていくことを想像しただろうか？

あいつは大丈夫なんだろうか。色相は……

こんな、普段の自分ならありえないようなことを気にしている事に驚いた。

もうあとのことは祈るしかない・・・ただ、今まで抱いたことのないような罪悪感が胸に湧いてくる。

――なぜだ・・・腹を決めて出てきたはずじゃなかったのか俺は――

柁陸のセーフハウスにいた時の燃えたぎる感覚が鳴りを潜めて、

代わりにもっと深い心の深層から何か溢れてきそうになっている。

雑賀はそんな狡噛の様子を隣で見つめながら、伝わってくる感覚をただじっと受け取り続けていた。

こうしているだけで意識の中でまるで自動計算が行われるように

狡噛の心情を読み取ってしまう自分が少し鬱陶しいとも思う。

狡噛が両手で強く握りしめたグラスにほんの少しウイスキーを足した。

黙って狡噛がそれを飲み干す。にわかに頬が赤くなり出していた。

この際、倒れるまで飲ませてしまうのもいいかもしれない。

しかしそんなことをしても、こいつは止まらないだろう。

無力化しようとするだけ無駄だ。

狡嚙はグラスをローテーブルにおいて、しっかり組んだ両手拳を額に当てて大きなため息をつき、額を何度か叩いた。

「泣きたきや泣け、狡嚙。風呂入って寝る。考えるのはそれからでもいいだろう」

「泣くって・・・何を言っているんです？ 先生らしく無い言葉だ」

「そうか？。じゃあこう言おう。・・・今お前はアドレナリンが過剰に分泌して交感神経が優位になっている・・・ノルアドレナリンの分泌量も増えて不安を感じている。そろそろ限界だ」

なにをセラピーロボットみたいな事をと狡嚙は苦笑いする。

そんなことわかっていますよ・・・と返そうとしたが・・・。

「は？・・・痛っ」

雑賀は狡嚙の僧帽筋から三角筋、上腕二頭筋を数度強く握った。わざと痛みに指先を立てるように。

格闘のことなどこれっぽっちも知らないはずの雑賀とて、人体に無知なわけではない。

「ふん。おそらくテストステロン値も爆上がりしているだろう。

出すもの出してスッキリしたらいいんじゃないかねえか？っていう話だよ。どうせご無沙汰なんだろう？

・・・エロ動画、見繕ってやるのか？・・・お前さんの好みはけっこう激しめと読んだがどうだ？」

「え・・・？」

このオヤジは酔っ払っているのか？

雑賀はソファの背もたれに後頭部を預けてズレたメガネを指先で戻す。

「ふふん」

その姿勢のままイタズラな笑みを浮かべて狡嚙を見ていた。

振り返った狡嚙が雑賀の愛嬌たっぷりのしたり顔を見るや、ため息を漏らす。

そう言えば、常守を最初にここに連れてきた時も、帰り際にこんな顔をして狡嚙を見た。

「先生・・・冗談はやめてくださいよ」

狡嚙の眉毛がハの字になった。

——この人は。何を考えているのかさっぱりわからない。

狡嚙は苦笑いしていた。

雑賀が唐突にこういうことを言うのは、ただの冗談ではなく、意図があつてのことだ。

本当に何もわかつちやいないな狡嚙。頭でっかちのお坊ちゃんが抜けていないんだ。

俺も人のことを言えた柄じゃないが、人と深く関わることより見聞きしたデータで人を察しようとする。

だから情緒や、心情、感情といったものの繊細な揺らぎに鈍い。

知性よりも遥かに影響力の強い心情の力を軽んじている。

人に影響し、人に影響されていることに気づいていない。

他人に対しても、自分に対しても。

そう・・・だから

——自分が本当に感じていることをきちんと感じようとしな...

危ういやつだ。このまま行かせてはいけない。そのままではダメだ。引き金を引けるのか!? 負けるぞ——

槇島聖護という男は狡嚙の想像した範囲でしか知らない。だがこれだけはわかる。

槇島
ヤツの方が上手だ。

雑賀の目の奥はそう言っている。だが表情は相変わらずとぼけた顔のままだ。

「どうだ、少しは冷めたか？ 初老の男にこんなこと言われちゃ流石に引くだろ。」

まあでもお前は変わり者のところはあるからな、その気があるなら相手してやってもいいが・・・なんてな。ははは「くすくす笑いながら雑賀は肉厚のある狡噛の肩をぽんぽんと手で叩き立ち上がる。

それと同時に森を吹き抜ける風の音と鳥の鳴き声のアラームが鳴った。

『お風呂が沸きました。給湯温度を四十度に設定変更します』と穏やかな声がキッチンから聞こえる。

いつのまに風呂を沸かしてくれていたのか。

そういえば、秋風の中をバイクで激走したために体が冷え切っていた。

酒も風呂も、きちんと落ち着かせるための雑賀の計らいだ。

「・・・ありがとうございます」

ふかふかのバスタオルとバスローブ、ミネラルウォーターがローテーブルに置かれた。

「出せるものは今のうちに出しておけ。ちゃんと自分を慰める。

・・・これは冗談じゃなくな。まああんまりこんなオヤジに言われちゃかえって萎えるか。

俺は書齋にいるから。寢室はお前が使え。気を使う必要はない。部屋は好きにしていいいが、早く寝るよ。

明日ゆっくり作戦会議だ」

と雑賀は手をヒラヒラさせながら書齋へと消えていった。

雑賀は社会から背を向けて、研究に没頭しているばかりの独り身の男だ。

誰かと真剣な交際をしていた頃もあったが、自分は恋愛に向いていないらしい。

交際した人物はそれなりにいれどシビュラシステムの推奨する相手とはことごとくうまくいかなかった。

いつも自分から壊してしまう。逃げると言ってもいい。

ひよっとしたら自分は女より男のほうが相性がいいのかもしれないと思ったこともあるくらいだ。

実際、交際相手判定の中に数人は同性ゲイが選ばれたこともある。

いずれにせよ、どこかでシビュラの言いなりになりたくない反骨精神があつて

人付き合いを拒み、研究に逃げるようにさせてしまうのだろう。

そんな雑賀のちょっとした楽しみになろうとしていたのが、
いまもって慕ってくるかわいい教え子の狡噛と、

おそらく今までの教え子の中で狡噛と並ぶ才女だと思う常守朱との関係だった。

もっとも、狡噛が潜在犯である限り、公安局エリート中のエリートである常守と結ばれることはないのは承知の上なのだが。

つい盲目になってしまいがちな狡噛にかつての自分を少し重ねてしまっていたのかもしれない。

そしてどこかでこう思ったのだろう。そんな狡噛をきちんと受け止められる常守のような女性なら自分こそ慕いたいと。

おそらく、常守は狡噛の離反でかなりダメージを喰らっているに違いない。

雑賀は目の前の人間に同調し手に取るように読んでいく。その相手になるのは大概が潜在犯だ。

雑賀が曇らせるのではない。元々シビュラシステムにそぐわない本音を持っている人物の本質を炙り出してしまおうのだ。

こればかりはどうしようもない。

だから自分と面と向かって会っても、色相が曇らない常守のような存在に依存してしまう。

——きつと泣いているだろう。

……いや、彼女ならきつと立ち直る。大丈夫だ……常守朱——

俺も……そろそろ年貢の納め時か。

そつえば、常守への講義はまだ……終わっていないんだったがな。

3、極寒の夜・前

バスルームに入った狡噛は、熱めのシャワーを浴びて冷え切った体を温めていた。

腹に染み込むウイスキーはほのかに内側を温めていたがそれも少量だ。

今し方流し込んだミネラルウォーターで薄まって、かえって冷えた気がする。

鍛え上げられた肉体。彫刻されたかのごとき筋肉の凹凸がくまなく濡らされ、その上から泡が流れ落ちていく。

このところの騒動で埃まみれになったままだった髪もスッキリした。

そして首から下半身まで、丁寧に泡立ったソープで撫でていった。

その時、左上腕に鈍い痛みを感じて動きを止めた。

厚生省本部ノタワーの最上部・・・レーザーチェンソーを振り翳した暴漢と格闘した時の傷だ。

他の傷よりも思いの外深く、医療用ナノドローンによる修復がなされていたため綺麗に治っているように見えて、押さえると深部に鈍い痛みが走る。それに伴い、腹の底から湧いてくる怒り。

無意識にその傷のあった左上腕を右手でぐいと握りしめた。

その痛みが、濯いだはずの感情を思い出させる。

――あそこには・・・榎島聖護・・・俺は奴と格闘して、常守が逮捕したはず・・・なのに・・・!!・・・――

ドン!!

衝動でバスルームの壁に強く腕を打ちつけてしまった。

今頃、雑賀が状況を察して肩をすくめているだろう。

「やれやれ・・・壊さんでくれよ・・・」とでも呟いたか。

狡噛は水の温度を急激に下げた。頭から冷たいシャワーを浴びる。

取り乱すな・・・なんのために風呂こに来た。

それでも水は冷たいまま、狡噛をどンドン冷やしていった。

「はあ・あ・あ」

やや震え気味に声を漏らし下を向いた。怒りに歯を食いしばっていた。

冷たい・・・寒気がする。

鼻先を伝って、唇を伝って、水滴が落ちていく。

そして目を瞑った。感情的になるな。

水の冷たさが誘うある出来事。

いまの狡噛には意外な記憶の浮上。

だが、浮かぶに任せた。

――
真冬、監視官に着任したばかりの頃。捜査で秩父山中の偵察をしていた時があった。

二班に分かれての捜査だったが夜に合流して監視官は席がフラットになるバンで、執行官は普通車で車中泊となった。それはかなり不本意な状況で、狭い普通車の方が暖かくなり、バンでは車内の空調を調整してもコートやジャケットでは心許なく、寝袋を持ってこなかったことを心底後悔した。

狭い山道を走るために乗ってきた車は都内を走るバンとくらべて車幅が狭いわりに空間が広い。

おかげで保温機能に乏しい。

普通車に乗っているベテラン執行官の二人、佐々山と内藤が新任監視官の事を今頃ヘラヘラ笑っているに違いない。

佐々山が持ってきたバーボンウイスキーの入ったスキレットをちびちびやりながら、

若い監視官達は世間知らずだと。冬山での捜査を舐めんなよと。

出かける前にここまで底冷えると伝えなかったのは、ベテラン執行官からの手荒い歓迎だと思ってくればいいのだが。

バンでは狡噛と宜野座がお互いの背中をピッタリとくっつけて横になっていた。

後部座席がフラットになるぶん横にはなれた。

レイドジャケットをかけた足元を温風の送風口へ向けておけばかるうじて足は温めやすいが、上半身までは暖まらない。だいたい長身の二人の足をレイドジャケット程度で包めるはずもなく、腰から冷気が背中に伝ってくる。ぎりぎり震えない程度にしか保温できない。

「なあ・・・狡噛」

「なんだ」

口を開くと冷気が口の中に入ってきてきそうさだ。

「古臭い番組で観たんだが、体が冷え切った人間を温めるのに素肌のほうが効果が高いと」

「らしいな」

たしか本で読んだことはある。そんな状況になるはずもないと信じて疑わなかった学生時代の頃だ。

狡噛も、宜野座も、色相の維持に努める健全な生活を営んできたインドア育ちには変わらない。

「ったく・・・」

凍死しそうなほどではないが、慣れないこの状況に選択肢が他に浮かばない。

狡噛はむくつと起きて外を見る。

いっそ走ったらどうだ？とも思ったが、野生動物行き交う深夜の山を走るバカがどこにしていると自己ツッコミをした。

「あいつら・・・クソだな。こうなる事をわかっていやがった」

リアウィンドウの向こうに普通車が見える。暖房が行き渡る狭い車内。

執行官達がトランプをしていて、酔っ払っているのか、むかつくほどゲラゲラ笑っている。

ダッシュボードに乗り上げた足をバタバタさせながら笑い、タバコの煙でむせる佐々山。

何を賭けているのかわからないが、ギャンブル好きの内藤は実に楽しそうだ。

それに比べてこっちは空間が空きすぎだ。温まった空気がすぐに冷える。

外気温はマイナス3度。車中は一桁台から上がらない。

今更、車を代わってくれなどと、執行官ごときに言えない。絶対。負けは認めない。

宜野座がたまらず弱々しい声を出した。

「狡噛・・・離れるなよ。殺す気か？」

いよいよこいつは限界らしい。

狡噛に比べて体が細い宜野座にこの寒さは結構堪えるだろう。

きっと一人なら黙ってじっと耐えるのだろうが、狡噛がいることがつい甘えになってしまった。

狡嚙がため息をついて、ネクタイを引き抜き、ひと思いにシャツのボタンを外した。ジャケットごと一気に脱ぐと、全身に鳥肌が立つ。

宜野座は目を瞑ったまま縮こまっていて、狡嚙が宜野座のネクタイを引っ張って抜き取り、シャツのボタンを途中まで外して背中から捲るように服を引っ張り上げた。

普段なら「ふざけるな」といってパンチの一発でもしてきそうな宜野座が、あまりの寒さから人形のように無抵抗なのが可笑しい。

長い前髪が持ち上がり、眼鏡も外れて宜野座の切れ長の目があらわになった。

即座に彼のコートと自分のフライトジャケットで上半身を包み、その中で狡嚙が宜野座を抱きしめる形で再び横たわる。

宜野座の頬が狡嚙の大胸筋にぴったりとくっつく。学生時代トップの成績を収めていた文武両道エリート狡嚙の心拍音は強く、そしてかなり早くなっていた。おかげで暖かいのは確かだ。

宜野座の頭を抱き抱えるような形になっているいま、狡嚙は宜野座の髪からただよう爽やかな香りが鼻腔をくすぐり、思わず宜野座の首から襟足を撫でて引き寄せるように優しく抱きしめその香りを嗅いだ。

長く持て余した二人の脚が絡み合って互いの股で太ももを挟みこむ。

宜野座の腕が狡嚙の腰にまわり、ピッタリと腹を合わせると互いの呼吸を全身で感じるほどになった。正直言って、ベルトのバックルが冷たいのだが。

「こんな体勢・・・水中訓練以来か」

「そんなことあったな。必要になることは一度もなかったが、こんなところで役立つとは」
役立つとも言えないが。

もはや狡嚙も寒さで自分が何を言っているのか意味不明だ。

お互い上半身を密着させる事にさして違和感を感じないのは、公安局に就任してもない頃にプールでのトレーニングで水中の格闘や救助訓練に勤しんでいたおかげだ。

すでに踏み入るのも命を危ぶむ汚染水だらけの都心の水を考えれば無駄な訓練だったが。

・・・だが、宜野座は感じていた。狡嚙の心拍がまだ落ち着かない。訓練でもないのに。

にわかに狡嚙の熱い息が宜野座の耳にかかって宜野座の体がビクツと反応した。

「動くなギョっ・・・・・・・・まずい」

宜野座が太ももの付け根のあたりで感じている感覚は思い違いではなさそうだった。

「・・・おまえな・・・弁える」

ただでさえ人手の少ない刑事課では新任から現場で捜査にあたり、犯人を追いかけ執行し、また次の捜査に明け暮れる。疲れ果てて眠りにつくことが多いが、そのせいか性欲にかまけている時間はない。

二十代が始まったばかりの男だ。放っておけば溜まってくる。

あまりの激務に色相が濁りそうな感じがして色相安定薬を投与して誤魔化していたせいで気づけなかった。

それは、緊張感が緩んだ刹那に襲ってきた。

いや、緊張感が強すぎてかえって煽ってしまった感もある。

宜野座も、狡嚙の反応がわからないわけではない。

人とここまで接触することなど、トレーニングか犯人と揉み合うくらいしか無い日常だ。

暖かく心地よい人肌の密着感は、意図せず今の彼らにとって極上の感触になっていた。

これが人間だ。所詮は動物だからか・・・。

抱きしめる事でオキシトシンが溢れ出てさらに心地よさを増し、身体がその先を求めてくる。

しばらくして宜野座が顔をあげると、そこに狡噛のやや充血した熱っぽい視線があった。
「――そんな視線よこすな――」

目を逸らす宜野座。その恥じらいに反して、宜野座の体も疼きだしていた。

男同士、こういう時は〈処理〉と割り切れる。

だが、こんな視線をされたら〈処理〉だなんて言葉で割り切れない気持ちになってしまう。
なぜだ・・・いつからだ。
いつから・・・

狡噛が宜野座の前髪を指先で横へ流す。

美しい顔をしている。狡噛は素直にそう思った。
眼鏡がない方がいい。

「ギノ・・・」

つんとした鼻先、その下に薄く淡いピンク色の唇。

その唇を狡噛の指先がなぞり、低く静かな声が響く。

「そのまま・・・」

なんて声だ・・・

考えたこともなかった。狡噛の声がこれほどいいとは。

「じっとしているよ」

そう眩くが早いのか、狡噛の唇が宜野座の耳に触れた。

狡噛？

お前は俺が欲しいのか？

その目は俺を欲している目なのか？

それともなんだ？

言ってくれ・・・。

4、極寒の夜・後

車内ライトを消した。

——本気なのか？・・・——

宜野座伸元。

求められることを求める。少なくとも当時はそうだった。

求めてもらわなければ自分の存在を証明することができないとどこかで思っている。

逆を言えば、求められたことに従いたい欲求が強いとも言える。

シビュラシステムにとって都合のいい駒になることに前向きで、

それが自己実現になるとさえ思っていただろう。

親が潜在犯なだけで社会からの視線は子供の頃からきつかった。

故に、学生時代は他から距離をとり、一人でいることをよしとしていた。

システムに認められさえすればこの屈辱的な人生の全てを覆せるはずだと信じていた。

そんな宜野座になんのフィルターもかけずに近づいてきたのが狡嚙だ。

おかしなやつだと誰もが噂するも、学院トップの成績の狡噛に口出しできる者などいない。そして彼は宜野座に普通に接していることを揶揄する者がいても全く気にしなかった。

この頃の狡噛は人とへ特別に誰かと仲良くなるという感覚はどこかで欠落していた。

人当たりはいいものの、そもそも人にそれほど興味がなかったせいもあって、誰にでも人当たりがいい若者だった。人に興味があるとすればそれは学術的な話で、

相手の気持ちを汲み取ることへの関心はあまり持ち合わせていない。

ゆえに、親友と呼べる者はいなかったし、必要としていなかったと言っている。

そんなものがいなくてもこの社会で十分自分の有用性を発揮できる場があればいい。

蓋を開けてみれば、厚生省公安局というエリートでなければ選ばれることはないと言われる、レベルの高い官職に適性が出たのは同期では二人だけだった。

いつしか、命をかけなければならぬこの職務に就く事で、

時には背中を預けることになる互いのことを【信頼できる友】として

・・・いや、それ以上の存在として、見做すようになっていた。

それに伴い、実はもともと持っていたのだらう狡噛の持ち前の優しさ与人懐っこさに、

宜野座は時々もたれかかりたくなっていた。

「好きにしるよ。狡嚙・・・」

・・・お前が望むなら。

俺の視線の先にはいつもお前しかいない。これからもずっとそうできて欲しい。

・・・なぜこんな気持ちになるのか・・・わからないが。

だが、狡嚙に次の言葉を耳元で囁かれて、吐く息に一段と熱がこもったのは確かだ。

「ああ・・・分かってる」

だから、求めた。

狡嚙の半開きになった唇が宜野座の薄い唇を覆う。

互いのベルトを外し手を差し込んだ。

〈処理〉でもいい。いまはこの感覚に陶酔していたい。

その方が色相が安定しそうだと思ってしまっほほど安らかな気持ちだった。

執行官2名が後ろの車にいたことなどすっかり脳裏から消えていて、互いに性を貪ることに夢中になってしまった。

バンの車内温度が即座に上がっていった。

時折揺れる車体と、窓に広がった結露に後ろの二人は気づいただろうか。

執行官たちの乗った車両のライトはとつくに消え、彼らは夢の中。

それにもない真っ暗となった辺りは月明かりに照らされてわずかに山肌と木々の輪郭が見て取れた。

セックスまではしなかった。

そんな準備も何もあつたものではないここで、持ち合わせの知識を総動員した狡嚙の理性が宜野座の身体を傷つけないで済ませる方法を選択した。

それでも激しくしてしまったかもしれない。

荒くなった息を強制的に整えている狡嚙が結露した窓を手で拭う。

窓の向こうに満天の星空がひろがっている。その美しさに思わず窓を下ろした。

こんなに美しい星空はノナタワーでは見られない。

宜野座にごねられるかと思って尋ねた。

「寒いかな？」

宜野座は汗ばんだ胸を上下させながら呆然と目を見開いたまま。

ドライ・オーガズムを初めて経験し、頭が真っ白になってからのウェットによる絶頂。体に力が入らない。ただ形の良い腹直筋の凹凸が汗で光っている。

月明かりに浮かぶ白く光沢を帯びた肌。

いまだ息を整え続ける宜野座の潤んだ瞳に月が映り込んでいた。

「いまは・・・平気・・・だ」

しばし無言の時間がすぎた。

満足してしまえば急に冷めて来て、気まずさからお互い目を合わせられなかった。

宜野座のことだ今の色相はどうなっているだろう・・・などと考えているのだろう。

しばらくすると無意識に左腕の監視官デバイスに触れていた。

「アンダー40。綺麗なもんだが？」

「勝手に調べるな」

細かい数値でいったらここ最近で一番クリアだった。

このところ40台後半へと突入し、下がらなくなっているのを危惧していたところだったのだ。

狡噛の腕を掴んでデバイスを切らせる。

その手には力は入っておらず、声のトーンもネガティブな意図はなく、むしろ落ち着いている。

冷えてきたため狡噛がウィンドウクローズのボタンを押した。

閉まっていくその刹那、宜野座の瞳に映った月が消えていくのを惜しむように狡噛がその瞳へ顔を近づけていった。

狡噛のデバイスを掴んでいた宜野座の手が狡噛の肩へと滑り上がる。

冷めたはずじゃなかったのか……。

お互いに思っただろう。

宜野座の瞳に口付けをした狡噛が頭を起こすと月明かりでぼんやりお互いの顔が照らされる。

こちらをじっと見つめる宜野座の吐く息が白く、そして小刻みに震えた。また寒くなってきた。

「来いよ・・・早く・・・コウ」

翌朝、佐々山の宜野座に対する、姫を扱うようなわざとらしいほどに恭しい態度を考えるに、狡噛と宜野座が同じ匂いをさせていたのには気づいていたのかもしれない。

—————

冷たいシャワーは一段と強く狡噛の体を打ちつけ、その激しい音で外に声が漏れるのを防いだ。

左手を壁に付き、肩を上下するほどに荒くなった呼吸を整えた。

局部に添えられた右手が今一度根本を強く握る。根こそぎ出すつもりで。

たまらず、支えていた左の肘が折れて壁につき、その前腕で倒れそうになっている体を支えるように額をつけると、右手で扱き上げる。もう一度、絞り出すような声が喉から漏れ出た。

手に流れ落ちていく熱い液体は即座に水シャワーに清められ、上がりきった心拍も落ち着き始める。

しかし、雑賀の言った「出せるものは今のうちに出しておけ」というのは、ただ興奮を冷ませという意味だけではない。

多分、狡噛にとって今・・・いや、それまでもずっと、避けていたし、認めてこなかった事かもしれない。

いま狡噛の脳裏に思い出された、あの時の白い息はあまりに切ない。

当たり前に隣に居ると思っていた時間はやがて消える。

俺が潜在犯堕ちするまでの数年間・・・

あの頃、宜野座は本当に唯一無二の相棒ができた・・・と思っていた。

狡噛もそれを理解していたはずだ。

5、後悔をしない男

狡噛はバスタブに浸かって水面をぼんやり眺めていた。

時計を見たら思ったほど時間が経過していない。

ずいぶん長い事、慰めていたと思っただが・・・意外に早かった。

頭が澄み渡っている。こんな事ならもっと早くしておくべきだったとさえ思う。

その時も宜野座で抜く・・・なんてことになっただろうか。

いや、もはやあの『ガミガミ眼鏡』に、あの時の色気など微塵も・・・

——まだやつのことを考えているのか——

「まったく・・・どうかしてる」

風呂の湯を両手にとって顔に擦り付け、ヘッドレストに今一度もたれかかった。

顎から喉へ伝う湯がやがて胸板を滑る。

芯から温まってく気持ち良い感覚を全身で味わっていた。

一体いつぶりだろう？　最後にバスタブのある風呂に入ったのも監視官時代だ。

雨でびしょ濡れになったまま宜野座の部屋に転がり込んだ。

――――

シビュラシステムが社会的階級や社会への貢献度、有用性によって借りられる部屋のグレードをある程度決めてくる。

宜野座の部屋はノナタワーから車で5分程度という距離の高級マンション。

狡噛も似たようなものだったが、殺風景でトレーニングマシン以外何もないような狡噛の部屋と違い、

宜野座の部屋には本物の観葉植物が置かれ、セクレタリーロボットが世話をしているおかげでいつもみずみずしかった。

愛犬のダイムがいて、行くといつも足にまとわりついて来た。

セラピー犬だったそうだが、実に可愛いやつだった。

フードプリンターのオートサーバーが置かれたキッチンに並ぶ皿やコップの色彩が豊かで、

狡噛は「まるで女子の部屋だな」と揶揄したことがあった。

その宜野座の部屋の風呂は髪に優しいシャンプーとトリートメント、ソープが置かれ、

いつも爽やかな香りがしていた。何もかも懐かしい。

思い出したのは、雨のひどい日での屋外捜査。

非番だった宜野座の部屋に仕事終わりの狡噛が転がり込んだ。

「まったく・・・びしょ濡れになって来やがって。車を手配して帰ればいいだろう！」

「腹が減って待ってられん。現場から近かったんだからいいだろう？今度なにか奢るよ。風呂借りるぞ」
そう言った側からすでに風呂場に向かっている狡噛の背中に毒吐く。

「勝手にしろ！いつもお前はそうやって、こっちの事情を汲み取りもしないで・・・」

「すまんが小言は後にしてくれないか？」

「だいたい、オートロックを解除して俺を招き入れたのはお前ギンだろう？」

絞ったら水が流れそうなほどに重くなった服を無造作に脱ぎ捨てる狡噛。

セクレタリーロボットが彼のスーツやシャツ、下着をまとめてクリーニングマシンに運ぶ。

しかし落ちた水滴はすぐには無くならない。

「くそ……俺の色相を濁らせるつもりか……」

ダイムに餌をやりながら狡噛の落とした水滴をワイパーで拭いて回る。

だいたいいつもそんな状態だ。今に始まったわけじゃない。

風呂から上がる頃には宜野座が二人分の食事を何も言わずにテーブルに並べていた。

「お、うまそうだな」

オートサーバーの出力した食事だが、そのチョイスにも多少手心を加えるのが宜野座だ。彩も忘れない。

「ほら着るよ」

素っ裸のままバスタオルで髪をわしゃわしゃと拭いている狡噛に

宜野座の部屋着と公安局支給のボクサーパンツが投げつけられた。

いつ置いてったのだろう？ 以前、間違えて宜野座のを履いて出勤したこともあった。名前を確認しなければ。狡噛はボクサーパンツを広げてまじまじと自分の名前を見た。

ご丁寧にこの公安局支給備品には名前が刺繍されており、ウエストゴムのあたりに「Shinya Kougami」とある。

「……っ……」

宜野座が腰砕けそうになる。首からバスタオルを下げて全裸で突っ立ったまま自分のパンツをまじまじと見ている狡嚙。

トレーニング後の共同シャワールームでも一切隠すことをしない男だ^{ヤッ}。

目のやり場に困ると言ったら「なんでだ？隠した方がむしろいやらしいだろう」と返してくる。

宜野座の体は狡嚙より細い。昔は貧弱な自分の身体の横に狡嚙が立つのを嫌がった。

狡嚙からすれば、宜野座のくびれた腰から丸く形のいい臀部を経て足首までにかけての曲線が自分にはない美しさだと思う。

そういえば、宜野座の下着や服は狡嚙の部屋にあっただろうか。

お互いに仕事を立て込んでどちらか現場に近い部屋に泊まることがあった。

だが、宜野座はダイムの世話がしたいために、帰れる時は自分の部屋に帰っていたからひよっとしたら狡嚙の部屋に宜野座のものはなかったかもしれない。今となってはわからない。

潜在犯墮ちした時に慌てて部屋を引き払うことになったから、

持ち物の大半を捨てる羽目になって、そのゴミの中にあっただのだろうか。

「ギノ……」

ふと無意識に漏らした名前。心の中では「すまない」と何度も呟いていた。

今一番それを言わなければならないのは常守朱だというのもわかっているが、今はなぜか宜野座のことが気がかりで仕方がない。

あれほどエリートにこだわり、頑なにシビュラの言いなりになってきた宜野座。

不本意にも犯罪係数アンダー300の俺に向けたドミネーターがありえない処刑モードになったとはいえ……局長の指示に従えなかった痛手は大きい。自ら有用性の証明を拒んだことになる。

いずれにせよ、自分の身勝手な行動に対しても後悔をしない狡噛にとって、

本当に大切な人に対してさえ滅多に「謝罪する」感覚を持っていない。

いや、あったとしても口は出せないたちなのだ。

雑賀はそれを「甘えだ」と言う。そして弱さを出せないのがお前の本当の弱さだと。

宜野座はエリート監視官としてその有用性がシビュラシステムに認められ、それ相応の待遇を受けて来た。

それに応えるべく目を見張る成長をして来たが、かつての無二の親友が潜在犯墮ちし、さらに潜在犯である父親が直属の部下になったことで幾重にも見えない鎧を着込んでしまった。

さぞかし重いだろう。

ダイムに餌をやっている時の横顔は刑事課にいる時の表情とは全く違ってまるで無邪気な子供のような笑顔だった。

「なあダイム。狡噛がまた執行官とうまくやっていけないってさ。おかしなやつだよな？」とダイムの頭を撫でながら眼を細めて笑う横顔は任務中には見たことがない。

監視官の仕事が板に付き出した頃、潜在犯である執行官をもっと理解しようとした狡噛は時々それを煙たがる執行官と距離を取られてしまうことがあった。

距離を取るのは当たり前だと刑事課の大部屋で冷たく言い放つ宜野座だが、プライベートで言えば二人は長年の腐れ縁だ、他の職員の前では絶対に見せない表情も、絶対に言わない言葉も、そして絶対に見せない身体の部位も、狡噛は知っていた。

・・・少なくとも自分が潜在犯になるまでは。

—————

狡噛は天井を見上げる。ヘッドレストに深く後頭部を沈ませていた。

左腕で両目を隠す。鼻先が赤くなっていた。

やがて目尻に流れる涙。それは止まることを知らない。

唇が震えはじめる。

不意に訪れた感情の波に、驚きこそすれ狡噛は争うことをやめた。

雑賀の言うとおり全てを出し切ったほうがいい。

理由を考える必要もない。理解しようとするな。

今はただ出し切るだけだ。

再び前を向いて動いていくために。

宜野座の姿が脳裏に浮かぶ。

なぜ今こんなにも昔のあいつとの時間を思い出すのだろう。

「ギノ・・・すまない」

やっと言えた。

そして、やっと涙を流せた。

佐々山が死んだ時にも流さなかった涙。

潜在犯に堕ちた時にも流さなかった涙。

人が変わってしまったかのような宜野座に、もう終わったことだと勝手にけりをつけ、そして再び裏切ってしまったことへの罪悪感と後悔が心の奥底にあったのに、見ないふりをしていた。

狡噛は後悔をしない。振り向かない。

いつどんな時でも、自分が選んだことの責任は自分で取る。

そう言い聞かせて抑え込んできた狡噛の感情のデブリが

かなり堆積していることを雑賀は見抜いていた。

「再び、お前がお前であるために。」

「為すべきことを為すために。」

今は泣け。

涙を流さなかったことを最後の後悔にしたいくらいだろう。

なあ、狡噛。

本当に強い人間というのは多くの挫折を経てくるものだ。

優しい人間というのは多くの哀しみを知っている。

人間、転んだ時にこそ、何かを拾ってくるものだ。

この世界のシステムは人間からそれを奪ってきた。

人間の怠惰さがそれを望んだのかもしれない。

しかし、お前が本当に強く優しい人間なら、

信念を貫くために捨て鉢にはなるな。

そして甘えは捨てる。

お前の人生の本当の試練はこれから始まる。

だから絶対に^{死ぬ}生きる。

何があっても。

